

沖

1
2018

俳句雑誌【35】



美濃しぐれ

能村 研三

平成三十年を迎えて

空 想 の 翼 巡 ら す 楳 火 か な

二 の 酉 へ ぐ る ぐ る 巻 き の 財 布 も て

窯 守 の 眼 鎮 む る 遠 枯 野

神 の 留 守 鵜 匠 が 解 く 布 烏 帽 子

いよいよ来年の五月に改元となり平成の年号も変わる。平成も最終章となるが、改めて平成の三十年を振り返ってみると、平成元年、先師登四郎は昭和の区切りとなる第十句集『菊塵』を上梓した。そして平成の世になつてからは、

霜掃きし筈はらくして倒る

の句から始まる、晩年の円熟期を迎えた。この頃の登四郎は齢を重ねるごとに俳句を作ることが楽しくなり俳句総合誌に作品八十句、百句と次々に発表した。自由で自在な句境から老艶な句、あるいは諧謔に富んだ句が生まれた。平成二年春には叙勲を受け、秋には沖は創刊二十周年を迎えた。平成五年には、平成最初の句集『長嘯』により詩歌文学館賞を受賞している。この『長嘯』のあとがきで登四郎は、「平成のあたらしい御代の始りから三年までの作品で、代とともに私の新しい出発となればと思つている。」と時代の変化

夕時雨足半で来る鵜匠かな

あかざ杖根揃へ賜ふ美濃しぐれ

枯蔓の戻り絡みや関ヶ原

談論の口火切る役北下し

しぐれ傘二段たたみに仕舞はるる

万葉歌誦して真間の時雨径

点を自らの新しい出発点と定める、常に自己更新をめざした登四郎らしい考え方である。また、『長嘯』とは詩を吟じることだが、別の説によると思い切り息を吐き息を吸い込んで、息を吐きながら声を出す遊びで、一種のストレス解消法でもあるそうである。」と述べ、ゆつたりとした心境も窺える。

私は本年も、俳人としての作家活動に加えて、俳人協会の仕事や新聞の選句など公私共に多忙な毎日となるだろうが、自らの平成の三十年の歩みを検証し次の世が新たな出発点となるようにしたいと思っている。

沖は、オリンピック開催の年、年号が新しくなって二年目の二〇二〇年に創刊五十周年を迎える。登四郎が常日頃から言っていた「俳句は一つ土俵」という言葉を大切に、沖の誌友や多くの俳句を作る方と共に真摯な気持で句作に励んでいきたい。

平成三十年一月より、

蒼茫集同人森岡正作氏を、沖副主宰に任命いたします。

沖主宰 能村研三

森岡正作氏 略歴

昭和二十四年 秋田県北秋田市生れ

昭和四十六年 沖入会

昭和五十七年 沖同人

平成十二年 「出航」創刊 主宰

平成二十二年 第三十八回 沖賞受賞

句集『卒業』『出航』『風騒』、合同評論集『処女句集と現在』

俳人協会評議員

俳人協会夏季指導講座中・高の部講師、俳人協会賞予選委員歴任。現在、

俳人協会夏季指導講座小学生の部講師、俳句大賞ジュニアの部選考委員担当。

NHK文化センター 柏教室・横浜ランドマーク教室講師。



鷹柱

森岡 正作

山頂に風駆け上がる鷹柱
国盗りの地にほろ苦き鮎雑炊
岐阜城はマップの折れ目時雨来る
冬眠にまだへるものの撃たれけり
鯉濃のために出刃買ふ冬隣
短日を振子のやうに過ぎしけり
冬天を掻き百幹の竹間引く

蒼茫集



おもしろうて

千田百里

喜 寿

辻美奈子

雑踏は街の歳時記神渡し

翔先生を偲ぶ

莨火を消して逝かれし冬銀河

岐阜吟行 四句

しぐるるや国盗りの城孤絶にて

* 蓑の欲し美濃のしぐれに遭ひたれば

ことば拾ひゆく時雨忌の美濃路かな

おもしろうてやがて冬ざれ舟溜り

珊瑚の朱

樋口英子

引き潮となるらし鴨の向き変わる

* 冬隣もうすぐできる逆上がり

長き夜を育てし遠野物語

あがなうて秋思ほぐるる舞扇

深秋や髪にをさまる珊瑚の朱

石榴熟れ腹の中まで割つて見せ

天辺の緋の暮れのこる鶏頭花

台風上陸ごうんごうんと乾燥機

文化の日喜寿といふ歳ははに無く

* それぞれに冬麗の鍵持ちて出る

寒き旅重ね詩になりかけの言葉

槌骨に菊焚く音のひびきけり

診察券

安居正浩

穂芒のそよぐと見せて光りけり

掛軸の裏に旧家の寒さあり

診察券だけの財布や冬に入る

* 湯豆腐や励まされぬて孤独なり

次の世は貝にもなれず湯冷めせり

病人は一間で足りるシクラメン

低き音 宮内とし子

冬立つや低き音してシュレッター
貼り替へて障子の前の正座かな
阿夫利嶺を窓に収めて新豆腐
ゆるゆるの手加減がよし萩括る
*遠目にも障子の白き合掌家
小六月旗日のバスがやつてくる

手湯 千田 敬

山彦も一拍おくれ神無月
*旅に冬帽来し方の嘘の数
時雨きて手湯にいやさる岐阜の旅
十八楼の廊いくまがり冬ともし
烏帽子とけば飛火焼け跡身に入みて
あかざの杖冬に艶増す節くれて

常夜灯 楠原幹子

ロボットの動作なめらか秋日和
芋の露愛に形があるときせば
*縞馬の縞の対称さはやかに
秋声や風の抜けゆく常夜灯
粛々と前例守り在祭
後ろ向きに走る審判秋高し

斜陽の色 田所節子

*木守柿斜陽の色と思ひけり
棟上げの梁に紅さす冬日ざし
胸奥は隠し通して大海鼠
母恋へば海にくつきり月の道
蔵杜氏の衿に越後とある法被
熱爛やだんだん説法めいてくる

表編裏編

甲州千草

素直さ

小山田子鬼

行く秋の靴音を吸ふ石畳

*素直さにまんまと老いぬ烏瓜

煎餅焼く手のひらひらと黄落期

おむすびは心のかたち芦刈り日

*表編裏編現世に似る毛糸

つまづけば引き返すのみ冬の蝶

冬波の弾力握り返す手も

口論の真ん中にある黒葡萄

日と水の表を知らず冬金魚

コスモスや小心者のゆらぎやう

冬眠や地球のどこも入口で

来世とはまばゆき言葉返り花

超 俗

田辺博充

一木一草

細川洋子

台風過呼吸ととのひし山河あり

*人も亦一木一草冬立てり

むかご蔓賽の神へと伸びぬたる

眠剤に割線のある小夜時雨

*超俗の高さまではと登りけり

夙一号瘦身の軸ぶれる

紅葉かつ散る句碑の句を誦しをれば

漣の風紋鳩の浮く間合ひ

雑居ビル椋鳥の大群降らしけり

茎枯の極まり藜杖となる

神頼みてふ手まだあり石路の花

美濃時雨椴皮の壁の解れがち

晴着撮る

菅谷たけし

てのひらを幼くしたる木の実独楽
赤とんぼ糸で吊られてゐるやうな
秋天へ謝し金婚の晴着撮る
蓮の実の飛べり老ゆるも愉しかり
*悪友は鬼籍に蛇は穴に入る
枝川に舫ひ繋りの冬鵜舟

音 量

松井志津子

長き夜の音量しぼるサスペンス
埴輪立つ冬の潮鳴り聴く目して
喪ごもりの淡き灯の洩る冬簾
初しぐれ鳥啄むに余念なし
*伊吹嶺の鬘の藍増す冬隣
箱いくつ壊して冬に囲まるる

色なき風

鈴木良戈

橋桁を抜けて色なき風疾く
柳散る木場の堀辺の明るさに
鉄橋の真上の夜の翳雲
実紫仏間の庭の陽を占めて
カーテンを厚く医院の冬構

猿 梨

大畑善昭

蜘蛛はまだ月光に餌をつつみをり
皺ふかく笑みて小春の漆搔
霜受けし猿梨であり旨かりし
貂跳びしとき水音も聞きにけり
白鳥の一影づつの二十五個
くれなびむ稜線は雪輝かせ

潮鳴集



焼海苔

齊藤

實

焼海苔を折れば音する朝寒し
錆のあるブリキの玩具文化の日
*木の実降るいよいよ風の有頂天
かくれんぼ鬼が落葉の音させる
短日やプリンの蜜が足りないぞ

天狼星

兵藤

恵

草の絮少女に羽のごときもの
冬隣紙の匂ひに親しめり
*猟犬が待つ筋肉を光らせて
北風が中洲の森に来てをりぬ
髪痩せて天狼星を仰ぎけり

江戸優り

大沢美知一

子規庵の屋根駆けのぼる糸瓜蔓
紅葉茶屋上り框の拭き込まれ
*冬の鳶（鴞）江戸優りとふ麓越え
忠敬旧居舟音の来る白障子
石といふ石みな羅漢冬深む

生存説

辻前富美枝

鴨来る疾うに居たかのごとき顔
秋の駒雲の行方を追ふごとく
*蛇穴に入るや信長生存説
山茶花の散りてこそある狭庭かな
しぐるるや兜煮つつき真顔なり

鼓翼 岡真紗子

野馬土手の今は保護林小鳥来る
雨音か百の鼓翼の稲雀
蔵元に「べこ」が首振る新走り
温め酒注いでつがれて誕生日
* 秋灯を過去へ過去へと高速道

狐目 平松うさぎ

論客の揃ひて夜半のひやおろし
* ジツパーの滑り良き日や冬に入る
気風良き声の人垣酉の市
LFDの青き街の灯冬に入る
霜月や土偶の美女は狐目で

炎噴く 須賀ゆかり

* 雨冷えやキューポラ青き炎噴く
秋つばめ薄暮の街に影を足す

朝霧や異凶のごとき向かう岸
コスモスの径やはらかくすれ違ふ
花型の人参咲かす夕厨

りんご売 石田 静

バス停の脇の燭光りんご売
初恋は襟の白線天の川
マネキンの指に添ひたる秋扇
発声のサ行あやふき焼芋屋
* 障子貼る矩形に波を撓ませて

山の気 森村 江風

秋祭終へて蒼穹がらんどう
晩節に微かな揺るぎ草紅葉
注し注され尽きぬラリーの温め酒
銅葺へ緑ひと刷毛初時雨
* 山の気を一気に捉へ鷹渡る

飛鷹選評



能村 研三

遺伝子の旅のはじまり草の絮 稗田 寿明

草の絮は草の穂、草の穂紫、穂草なども同意の季語。イネ科やカヤツリグサ科の雑草が秋になると穂花を出し、それらがほつれて絮状になったものを「草の絮」という。絮は植物の種を運ぶためのもので、人類の発祥するずっと前から続いており、種を運び次の世代に命を繋いでいる。これを作者は「遺伝子の旅」と想像力を働かせて詠んだのが若々しい。作者の行く手の空の青さと、限りなく風に乗って飛んで行く草の絮に、遠い旅路のイメージが重なる。

菊膾月のしづくを吸るかに 栗坪 和子

先師登四郎からの教えて「食べ物は美味しく詠まなければ」と言われた。菊膾は菊の花びらを茹で、三杯酢やからしあえて食べるものだが、一杯呑み屋などではこうしたものは出てこない。少し高級な割烹などで食事をされたのであろう。食用菊には黄色系と桃色系があるが、ここでは月の色した黄色の菊膾を、月のしづくのように吸った。何とも美しい喩えである。

秋寂ぶの潮聴く崖の鵜捕人 下村たつゑ

岐阜の勉強会で鵜飼に使う鵜は茨城県で捕獲すると聞いたばかりだが、作者は茨城県の鵜を捕獲する現場を訪ねた。海鵜を捕獲出来るのは、日立市十王町伊師浜海岸で、海面から断崖絶壁に人が通れるだけのスペースを削って、丸太と拵で作った鳥屋でおこなわれる。秋に越冬のため南下し、茨城県の太平洋岸が鵜の通過点になるので、秋寂びの潮の音が聴こえるような場所です。

訥弁も巻き舌もあり昼の虫 永澤千恵子

昼の虫は秋たけて昼も鳴いている虫のことで、暗くなって聞く虫の音とはまた違った感じがする。ひんやりと涼しく残る虫の哀れさもある。テレビの音を消して、耳を傾けてみると訥弁の鳴き方をする虫もいれば巻き舌で忙しく鳴く虫もいる。

群青のどこか寂しき曼珠沙華 西村 渾

山口誓子に「へつきぬけて天上の紺曼珠沙華」という句があるが死人花と呼ばれる花という不吉なイメージもどこかにつきまとう。群青の空に、曼珠沙華が紅い薬を張って真直ぐに立っている、日本画の一幅を見るような色彩対比の美しい世界だがどこか寂しさを漂わせる。

鰯雲いま顛末のどのあたり 鈴木 光影

顛末とは初めから終わりまでという意味。顛末書はものごとの一部始終を報告するための書類で、始末書より事の重みはやや軽い。この句、いずれにせよ社会人として報告を余儀なくされたことに責任を果たしているのである。鰯雲が広がる空を見上げながら報告書の作成に追われた。(以下略)

三角に

(自選二十句)

楠原 幹子

ぎんなんの乾く縁側御師の家
つづれさせ聴きをり眼鏡拭いてをり
ねこじやらし判断力の危ふかり
奔放に湧く山霧のラプソディー
中能登の稀の日和やくわりんの実
たまご焼ほどの幸せ冬ぬくし
目つむりて雪吊に雪降らせけり
木守柿とうに空家となつてをり
裸木のあつけらかんとして威風

一望の枯野無尽の静を蔵す
満開のさくら樹液の熱からむ
朧夜の深爪しくと痛みけり
わが寿命地球の寿命黄砂降る
母ほどの根性はなし花大根
蛍火のひとつに氣息合はせをり
小回りのコミュニティーバス花柘榴
採血のてのひら開く半夏生
生くるとはかくも単純海月かな
大利根の一都五県を統べて朱夏
八月六日折紙をまづ三角に

『銀の笛』

(自選二十句)

栗原 公子

佳きことのひそみてをらむ初暦
元旦の空たふたくて退屈で
冬麗やふれて分け合ふ静電気
淋しさの正体冬の薔薇に棘
銀の笛欲し全山を芽吹かせむ
陽炎の入り口ペダル強く踏む
万緑に染まり山彦かへり来る
庖丁に水垂直に当てて夏
涼しかり星座は花の名を持たず

あぢさゐが好き音たてぬ雨が好き
全力のつもり私とかたつむり
自由とは涼しかりけり淋しかり
台風来すこしわくわくしてゐたり
月光も編みこみ烏瓜の花
小鳥くる明るき詩を詠へよと
誰もみな遺されしもの水澄めり
砂時計の時は銀色クリスマス
冬銀河イヤホンに聴くシベリウス
待つといふ悦びもあり冬木の芽
日記買ふまだ見ぬ吾に会ひたくて

沖作品



能村研三選

自治体の改革プラン草の花

底抜けにおしやべりな空野分あと

* 遺伝子の旅のはじまり草の絮

小春日やたまごサンドのあふれやう

葉脈に刻む生き様 朴落葉

松手入日のあるうちにと言ひながら

弘法寺さんは大寺夜長の灯

粗壁に去來の時雨笠ひとつ

新松子緊まりて黒き海の砂

* 菊膾月のしづくを啜るかに

* 秋寂ぶの潮聴く崖の鶴捕人

囀鶴の解かれて昼を惚けゐる

秋深し権現道は寺を据糸

切り取り線切れば葉書や神の留守

切字とは無患子の実の黒光り

千葉

稗田 寿明

市川

栗坪 和子

千葉

下村 たつ糸

* 訥弁も巻き舌もあり昼の虫

残菊になほ蜜を欲る羽音かな

秋深し悲喜こもごもの文届き

湯上りの髪を梳きつつ十三夜

ざくざくと踏み音揃ふ枯葉山

* 群青のどこか寂しき曼珠沙華

県境を分かつ湿原草紅葉

必勝の手綱さばきに秋気満つ

格子戸と色なき風の商家かな

行く秋やぼんぼん時計の音侘し

* 鱗雲いま顛末のどのあたり

ハロウインを人の仮装で通しけり

看板だけ新しくする秋の暮

沖繩や狂ひ花には狂ふ故

岩手

永澤千恵子

千葉

西村 渾

東京

鈴木 光影